

「藤原鎌足 = 東国出自論 ~ もうひとつの古代史逸文 ~」

忌 部 守

1 春日大社の祭神

近鉄電車で平城宮跡を通過して、奈良の街に近づくと最初に気が付くのは街の奥に横たわる三笠山の姿だ。三笠山と言えば奈良の守り神・春日大社である。

この春日大社は、七二〇年の平城遷都時には既に鎮座していただとお考えの向きも多いと思うが、実は遷都から約半世紀も経たった神護景雲二年(七六八)に造営されている。つまり、平城遷都の後には、まず東の高台の上の外京に藤原氏の氏寺である興福寺が建設され、次に聖武天皇が東大寺を建てて大仏開眼を行なったのが七五二年の事で、その後姿を現したのが春日大社ということになる。

意外なのは建造時期だけではない。平城京で権力を握る藤原氏の氏神ならば、その主祭神は当然、出身とされる中臣氏の祖先神であるアメノコヤネ(天児屋根)のはずだが、それが違う。春日大社の第一殿に祀られているのは東国の鹿島神宮の神であるタケミカヅチ(武甕槌)で、アメノコヤネは第三殿である。なぜ、東国の祭神が藤原氏の氏神として祀られているのか。藤原氏が本当に中臣氏の出身なら、中臣氏の祖先神であるアメノコヤネを第一殿に祀るはずだ(*1)。

これは重大な問題なのだ。祖先神を大事にしない氏族など有り得ない。したがって、その合理的な解答は藤原氏は本当は中臣氏の出身ではない、という事になる。鎌足の家系以外は、中臣氏であっても藤原の氏の使用は認めないという事実も、それを傍証する。

奈良時代に書かれた藤原氏の伝記『藤氏家伝』によれば、藤原氏の始祖・鎌足は「諱は鎌足、字は仲郎、大倭国高市郡の人なり。(中略)美気古卿の長子なり。母は大伴夫人と曰う。大臣は豊御食姫天皇二十二年の甲戌の歳に藤原の第に生れる」(*2)とあり、家伝によれば推古二十二年(六一四)に大和国高市郡の藤原邸で中臣御食子(みけこ)の長男として生まれたとある。これは、言わば功成り名遂げた後の公式見解であって、必ずしも事実を述べたものではない。

一方、平安時代の歴史物語『大鏡』には「孝徳天皇の御代よりこそは、さまざまの大臣定まりたまへんなれ。但し、この御時、中臣の鎌子の連と申して、内大臣になり始めたまふ。この大臣は、常陸国にてむまれたまへりければ」(*3)とあって、具体的な地名は記さないものの、東国の常陸国の生まれと書いている。この『大鏡』には鎌足(鎌子)の子である不比等が天智天

皇の御子であるとの記事を載せている（長男は定恵）ほか、明らか
 に東国生れ、大和鹿島郡に生まれる」とあり、この或る説とは『大鏡』
 を以って鎌足を「大鹿島郡に生まれる」（*4）とあり、この或る説とは『大鏡』
 まで記され、春日大社の主祭神が鹿島神宮のタケミカツチであること
 を簡易には否定できないことになる。鎌足の本当の経歴と出身地を
 知ることは出来ないだろうか？

それは、冒頭で見た春日大社の主祭神であるタケミカツチの
 存在だ。春日大社の主祭神であるからには、必ず始祖鎌足と藤
 原氏に深い関係があるはずだ。

日本は、八世紀に入ると大宝律令の施行により本格的な律令
 国家としてスタートするが、その前段階の地方行政組織である
 「評制」（国郡制の前の体制）を知る貴重な史料が以下の『常陸国
 風土記』である。「古のいへらく、難波の長柄の豊前の大朝
 御宇しめしし天皇のみ世、己酉の年大乙上中臣（ ）子、大乙
 下中臣部兔子女子等、惣領高向の大夫に請ひて、下総の国、海上の
 国造の部内、輕野より南の一里と、那珂の国造の部内、寒田よ
 り北の五里とを割きて、別きて神郡を置きき。其處に有ませて
 香島の大神の社・坂戸の社・沼尾の社、三處を合せて、惣べて
 引用が長くなつたが、周知の通り、タケミカツチは現在の茨
 城県鹿嶋市に鎮座する鹿島神宮の主祭神だ。そして、『常陸国風
 土記』の記事は地方行政区画としての香島郡（当時は評）と鹿島
 神宮の創設の経緯を示している。孝徳天皇の時代に、海上国造
 と那珂国造の領地を削って、新たに神郡である香島郡を作り、
 そして三つの神社を統合して鹿島神宮としたとある。香島郡の
 創設に当たって、惣領である高向大夫に対して中臣（ ）子と中
 臣部兔子が申請したとあって、通常はこの（ ）子を鎌子（鎌足）
 として中臣氏族の二名が鹿島神宮の代表者ではないかとし、鎌
 足を中臣氏の傍流・中臣鹿島連の出身とする見方があるが、筆
 者はそうではないと考えている。

元来、中臣氏はト占を担当して、大陸・半島に近い西日本を
 拠点として、東国には地盤がなかったはずだ。例えば、『新撰姓
 氏録』の津島（対馬）直は「天兒屋根命十四世孫雷大臣命之後也」
 とあり、対馬に雷命（いかづち）神社が現存するが、これは氏の
 拠点である。津島直は、対馬の古代豪族で、この一族が上京し
 てト部、そして中臣氏になったと考えられている（*6）。

藤原鎌足が、この中臣氏族に直接関係がないとすれば、さらなる手掛かりがないだろうか。神郡である香島郡の創設は、二つの国造のうち、常陸国の那珂国造の領地を中心に割譲してできたものである。つまり、元々鹿島神宮は那珂国造の領地にあった神社で、那珂国造の一族が奉斎してきた神社であったのである。それが、鹿島神宮の鎮座地を香島郡として独立させ、その行政官が新たに中央祭祀を専業とする中臣氏族になったというのが実態である。

それでは、那珂国造とはどのような一族であったのか。『先代旧事本紀』によれば、那珂国造は、伊予国造と同じ先祖、すなわち神八井耳命の後裔である建借馬(たけかしま)命とある。神八井耳命の後裔とは多氏(太氏)の一族であり、また名前にカシマとあるように本来国造一族の祖先神である鹿島神を奉斎していた。神八井耳命の中央における後裔には太安万侶を排出した多氏(太氏)がいる。

筆者は、鎌足はこの那珂国造の一族の出身ではなかったかと考えている。つまり、鎌足が鹿島神の本来の奉斎一族の出身であるということが重要なのだ。

2 鹿島神宮の祭神

霞ヶ浦の北浦に程近い茨城県鹿嶋市に鎮座する鹿島神宮の主祭神がタケミカツチ(武甕槌)である。甕は神の依り代である聖器であり、「甕槌」は「雷」に通じる荒ぶる神として勢威を示すことになる。

『日本書紀』によれば、天孫降臨に当たって、アマテラスは子のオシホミミに代えて、孫のニギノミコトを降下させるが、その際に葦原中国を平定させたのがフツヌシとタケミカツチの二神だ。これは単なる神話ではなく、持統女帝が子の草壁皇子ではなく、孫の文武天皇を皇位継承させ、それを支える左大臣・物部麻呂と右大臣・藤原不比等という時の律令政府のメンバーを表す寓話であると筆者は考えている。つまり、『日本書紀』には明記されていないが、タケミカツチは藤原氏を象徴している。

この鹿島神宮の主祭神タケミカツチをなぜ、藤原氏を象徴させ、春日大社の主祭神としたのか？その合理的な解答は、藤原氏の始祖・鎌足はアメノコヤネを始祖とする中臣氏の出身ではないが、自身が奉斎していた祭神が、タケミカツチであったという事ではないだろうか。

鎌足が、鹿島神を奉斎する那珂国造の一族の出身であるとするならば、那珂国造が支配する地元では有力者であることは疑いがないが、都である平城京に上ればそういう事にはならず、いわば只の地方の国造一族というに過ぎないことになる。大宝律令制下では、地方の国造一族が中央で採用されるため

には、郡領（令制後の国造）の子弟が舎人や兵衛のいずれかになる道があるが、この時代も同様な状況であったろう。鎌足も、舎人として仕えるか、兵衛として軍事的能力を発揮して昇任して行くしかないだろう。

記録に表れた鎌足の評価は、乙巳の変における武人的な行動や、白村江の戦いにおける軍事的な武将としての姿であり、兵衛としてスタートした可能性が高い。しかし、鎌足が例え軍事的才能を開花させたとしても、それだけでは下級貴族に過ぎず、天皇や皇子に近づきその腹心に近づく事は出来ない。そこで、天皇や皇子に近づく手段として有効なのは、中央の宮廷祭祀を担当する中臣氏の存在ではなかったのではないか。つまり、中臣氏に東国の有力神社の祭祀権を与える見返りとして、中臣氏を名乗る事を許されたという見方である。そして、中臣氏を名乗ることで、鎌足は、まず軽皇子、そして次に中大兄皇子に近づき親密になることが出来たと考えられるのである。

大化元年（六四五）六月、いよいよ鎌足の最大の成果である乙巳の変が起こり、時の権力者である蘇我入鹿が暗殺された。入鹿を直接撃ったのは佐伯子麻呂と若犬養網田の二人であるが、鎌足も弓矢を持ってその場に居り、事件後、孝徳天皇が即位し、中大兄皇子が皇太子、鎌足が内臣となったと『日本書紀』は記す。時に、鎌足三十二歳であった。弓矢を持って控える鎌足は、兵衛出身であることを彷彿とさせる。

神郡である鹿島郡が中臣氏によって創設されたのが、その四十年後の大化五年（六四五）であり、鎌足は既に力を持っていた時期である。つまり、鎌足が鹿島郡の建郡（立評）に中臣氏を関与させる事が可能であったと考えられる。中臣氏に取っても東国に地盤を得ることはとても重要であった。

筆者は、実は乙巳の記述事件の内容が、『日本書紀』の既述通りであったとは思えないと考えている。なぜなら、宮殿の内部の密閉された空間で実行された事件が、当事者間の会話の内容を含まれて、あれほど臨場感のある記録が実際になされたとは考えられないからである。事件の場所を宮殿として、皇極天皇の御前に入鹿の殺害が行われているのは、クエダの正当性を主張するためだろう。『日本書紀』特有の潤色である可能性が高い。『日本書紀』編纂の責任者は、鎌足の子である藤原不比等なのである。

ただ、いずれにしても、入鹿が暗殺され、鎌足の功績が認められた事は、その後の人や状況から明らかだろう。孝徳天皇にせよ、中大兄皇子にせよ、自分たちの政治を行っていき上で蘇我氏の存在が邪魔であったことは想像に難くなく、いわば汚れた役をやっけてのけり。蘇我氏が決して悪い政治を行って

我氏は、技術を有する渡来人を配下にして当時では革新的な政治をしてきたと考えられる。吉備など全国の各地に、天皇家の直轄領である屯倉(みやけ)を創設し、管理も渡来人を使って行っていた。つまり、天皇家にも貢献していたのである。

また、蘇我氏は、出自がはっきりしない無名の一族でもない。『古事記』にある通り、第八代孝元天皇の後裔と考えるべき。蘇我本宗家が乙巳の乱で滅ぼされたために、『日本書紀』には詳しく記述されていないだけだろう。したがって、孝徳天皇や中大兄皇子らの天皇家側からすれば、中心の政治を行いたいという理由であり、蘇我氏のような豪族側からすれば、主導権を握りたいという両者間の抗争に違いない。そこに、鎌足が介入する余地があつた訳であるが、結局、藤原氏は天皇中心の律令体制を構築するという名目の中で、蘇我氏に代わって藤原氏が権力を握るという結果になつた。評価する事が出来る。

3 「藤原鎌足＝東国出自」の理由

実は、鹿島には鎌足の生誕地という伝承を持つ鎌足神社が存在する。鹿島神宮から西へ北浦に向かつて二キロの場所、住居は鹿嶋市大字宮中下生(しものう)。現在は何の変哲もない所だが、鹿島に実査に行つた時に判明したのは、北浦が古代には水際はもっと近く、鎌足神社の付近まで来ており、そこには大船津の湊があつて、鎌足神社は実は交通の要衝にあつたのだ。参詣者はここで船を降りて陸路で鹿島神宮まで向つたと考えられる。現在も、鎌足神社から城山の脇を通つて鹿島神宮まで続くつづら折りの細道が残っている。この神社は少なくとも江戸時代以降は存在しており、小さな木製の本殿がひっそりと建つだけであるが、境内には「大織冠藤原公古宅址碑」という石碑がある。江戸時代には、ここに鎌足の住居があつたとの伝承があつたと考えられる。鹿島神宮の祭神はタケミカヅチであるが、当初からそこの祭神がタケミカヅチであるかは分からない。そのカギとなるのは、七世紀中葉になると鹿島の地が、蝦夷征討の出発地になるという事実である。常陸の国に鹿島郡が建郡された直後の事である。例えば、『日本書紀』によれば、斉明五年(六五九)に、阿倍比羅夫が水軍一八〇隻を率いて蝦夷国を征討したとあるが、実は鹿島は蝦夷征討の前進基地になり、ここから蝦夷征討の船団が本殿は蝦夷征討のために北面していることでも分かる。『日本書紀』の神話にタケミカヅチが語られて以降、軍神としての性格が明確になって、蝦夷征討の出発地である鹿島神宮の祭神がタケミカヅチに仮託されたのではないだろうか。そこには、藤原氏の力が大きく関わつたと考えられる。少なくとも、

『日本書紀』の神話においては、タケミカヅチと鹿島は結び付けられていない。

また、本稿の冒頭で述べた平城京の春日大社造立に当たっては、東国の鹿島神宮の分霊を神鹿の背に載せて遷座させたのである。同時に、鹿島の鹿が奈良に住み着くことにもなった。

さて、その鎌足が亡くなるのが、天智八年(669)十月のことである。『日本書紀』によれば、天智天皇は自ら鎌足の自宅に赴き、望むことがあるかと問うと、鎌足は「生きては軍国の為に役に立てず、死ぬに当たっては何もない」と答えたという。「軍国の為」については解釈が色々あるが、最も有力なものが白村江の戦いである。

つまり、663年に唐・新羅連合軍に大敗した事が後悔であったというものである。鎌足は、その出自からも大臣ではなかったが、天智の軍事顧問であった可能性が高い。子供の頃から中国の兵法書である『六韜』を諳んじており、乙巳の変では蘇我入鹿の暗殺の実行犯として実績を上げたが、外国との戦争には判断を間違え、敗戦に終わったという後悔である。ここにも、東国出身の軍人としての鎌足の姿を彷彿とさせるのではないだろうか。

すべては、鎌足が東国の常陸の国の国造家に生まれ、成人して都に上って軍人として名を成した事に始まるのである。その後、不比等や子孫たちは大貴族・藤原氏として、近現代に至るまで権力を握り続けた。

【註】

(*1) 土井実「春日大社」(谷川健一編『日本の神々』第四巻・白水社)

(*2) 『家伝上』(『群書類従』第五輯)。読み下し文は筆者。

(*3) 『大鏡』(新潮日本古典集成)

(*4) 『多武峰縁起』(『群書類従』第二十四輯)

(*5) 『風土記』(日本古典文学大系・岩波書店)

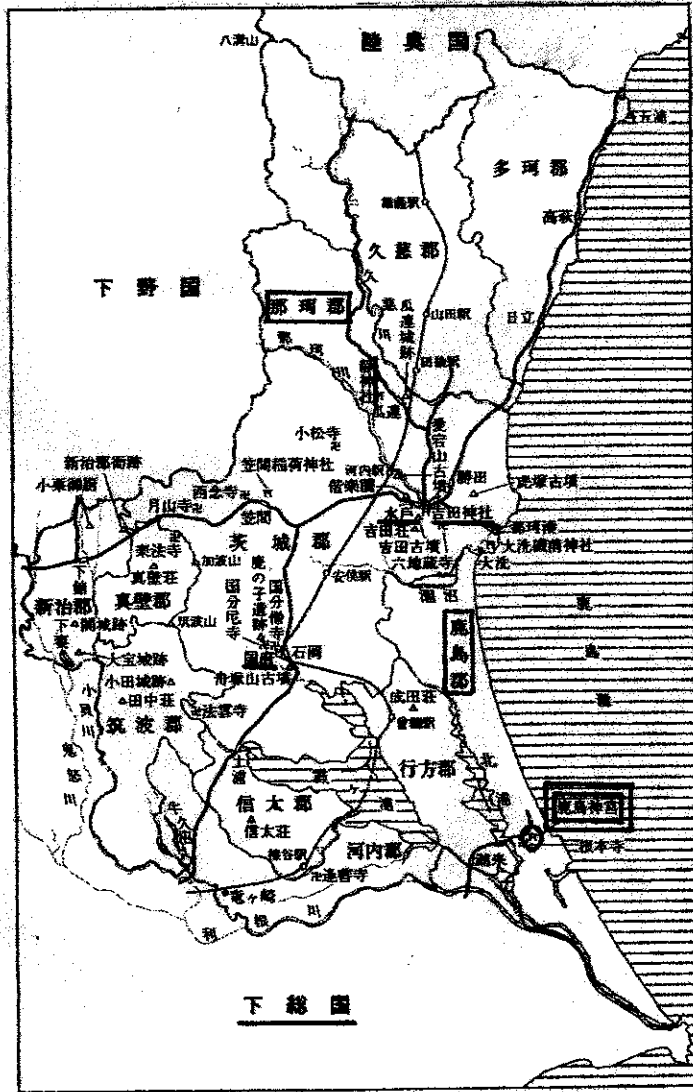
(*6) 永留久恵「雷命神社」(谷川健一編『日本の神々』第一巻・白水社)

(*7) 大和岩雄「鹿島神宮」(谷川健一編『日本の神々』第十一巻・白水社)

以上

(『歴研よこはま』第八十三号・忌部守「藤原鎌足＝東国出自論」
『もうひとつの古代史』逸文③)

常陸国略図



国史大辞典